

“号外”_{,,}パート13

平成25年2月11日

発行所:四国時報

嘘つきな「さや侍・川上道大」の狂言劇場!!

〒768-0011

証拠示せず「企業舎弟」から「共生者」と名称追加

観音寺市出作町603-3

益々、人気大好評の一連のシリーズ。小悪党・川上道大

電話 0875-25-6883

との言論合戦!今回は、被告川上の幼稚な思考ではある

編集発行人 木下 俊明

が、原告に新たな表現が増えた。本紙「四国時報」が、反社会的勢力の「小道具か?」又、広義で「企業舎弟」、狭義で「共生者」との見出しがついた。被告川上の狂った思考能力の中で、懸命に考え出したのだろうが、賢明な読者の皆さんは、原告の発行した今号を含めて全16号中の内容の中に、狂った被害妄想者の被告川上が決め付けるような案件は何一つ無く、むしろ庶民の声を代弁する正当な報道姿勢に多くの支持者・声援者が月毎に増大している現実を知るべきであろう。被告川上が、己の立場に危惧し、関西筋の人物の入れ知恵等と共謀して仕掛けた挑発と中傷。その理由付にさも原告が反社会的と言われる人達の仲間でもあるかの如くに、それが真実であるかのように捏造した記事を書き立て、己の自業自得から起こった、原告の一切預かり知らぬ「川上襲撃事件」に連なっておるかのようこじ付けたり、これまでコロコロと主張の内容を変え、時系列に精査すれば全く整合性の無い記事となっていることさえも気付かぬ間抜けぶりだ。それにしても以前に四国時報号外で記したが、被告川上は自己陶醉(マスターベーション)者だ。四国タイムズ1月5日号では「11回を数える号外を精査したところ、やはり六代目山口組の重大な役割を担っているのではないかと思われる内容の記事が目立ちました」と世迷い言を記し、又、今月号では「いま振り返ってタイトルを眺めると、なかなか的を射た表現であったと今更ながら納得できる」と誇示している。被告川上の読解力の無さ故か、はたまた意図的にボケた振りをしてのことかは解らないが、その程度の低さは中学生以下である。又、勝手主義者でもある。反論・反撃されると、威圧やら脅しやらと騒ぎ、今月号には「準備書面で、本紙の表現にイチャモンを付けて圧力をかけるという暴力団特有の手口ではないか」と憶面も無く記しておるが、笑止千万、又、己の知事等に対する表現記事を棚上げにしていることだ。さらに、原告の四国時報を「悪質なクレーマー」等とは、どの面さげてと言いたくなる。そっくりこの言葉を被告川上へお返ししよう。これは、被告川上自身が自分の事を告白しているのだと多くの読者の笑い者になっている。原告を「共生者」と表現を変えたのは、「企業舎弟」という裏付けが取れない何よりの証し。四国タイムズで原告以外の記事も一読してはみたが、相変わらず同じネタ(特に襲撃事件)ばかり、しかも、人を非難する内容ばかりだ。本当に取材しておるのか疑問である。ところで川上よ?お前さんは一体何様のつもりかね?何の自慢にもならんお前の前科歴や人生実像を恥じるどころか、これをあたかも勲章の如く披露しておるが。自らの襲撃事件を延々と書き続けて、安全保障の盾にする卑劣さ。先にも記したが、「自業自得」「因果応報」そのものである。いつの世にも、こんな輩が一人位は居るのだから。又、笑えるのが毎月、「号外でまた書いてまっせ」と四国時報号外を被告川上にスタコラ届けに行くチョロ松もいるようである(笑) 裏面へ

ことさら、真実かの如く記事を捏造して、下世話な世間の興味を引き、己の危機的地位の保全を計るため、長年月の悪行に、元々老耄した被告川上の妄執が、病的な程の執拗さで、荒唐無稽な蒟蒻問答を展開して、誤記事で大失態を演じ、自ら恥を曝している。これまでに自信満々報じた事に、痛烈で適確な反撃を受ける度、次々と空想・妄想記事で逃げまくる川上。「この裁判、川上先生が絶対に勝つ」と豪語する川上支持者がいるというのに、しっかりせんかい!!ところで、被告川上に偽情報を流した、大法螺吹きの観音寺市常磐地区在住の十鳥晴美氏の事は、その後どうなっているのかね？都合の悪い事には知らん顔かい？十鳥氏と仲良くしていた地元の人達でさえ、彼を見限っているとのことである(取材にて証言)。「天知る・地知る・人が知る」人様の悪口・陰口は、いずれ本人の耳に入ると承知の上で言うべきである。以前、四国時報号外で被告川上は、鼻が効かなくなったようだが。と記したが、彼も次々と老化現象なのか、文書読解力や眼力、洞察力が衰えているようだね。原告は、各方面から被告川上の事を噂や、伝聞で、「ドラッグ依存症の後遺症がある」とか「ホモ」だとか、他にも個人の尊厳を傷つけるような内容を多く聞いているが、被告川上のように裏付けの無い断定的な記事を報じる程、愚かではないし、厳に謹んでいる。ここで、本シリーズを途中から読まれる方のために、これまでの粗筋を簡略に記してみよう。

平成23年11月、原告は、二十歳の頃からの念願であった、地元でのミニコミ新聞「四国時報」を創刊した。これを知った悪質新聞で知られる「四国タイムズ」川上道大は、地元香川県での独占意識の危機感から「飛んで火に入る夏の虫・六代目山口組倭和会の香川進出を手引きする四国時報編集発行人・木下俊明企業舎弟」等と言いつけ、挑発を始めた。先ずここで大きなミスを被告川上は犯した。溝口敦著の出版物によると、「六代目山口組倭和会」は平成21年2月に「六代目山口組盛力会」の地盤を引き継ぐ形で、飯田倫功若頭が会長となり発足したとある。その倭和会発足の時期と四国時報創刊の時期とに2年9ヵ月もの空白期がある事実だ。このことは決定的に当初の被告川上の主張に信憑性が無い事となる。以後、証拠を何一つ示せないまま、何だかんだと言いつけ、決め付け、こじつける不法行為に手順を踏んで「抗議文」「訴訟」そして「号外」による中傷記事への反撃と現在に至っています。(四国タイムズに対する反撃号外第1号から全号バックナンバーあり・ご希望の方はお申し込み下さればお届け致します)

今回の中国による「レーダー照射」に安倍首相は、参院本会議で「不測の事態を招きかねない危険な行為だ!一方的な挑発であり、極めて遺憾だ!」と厳重抗議している。これと同様以上に被告川上は、原告に対して「活字・文字」という紙爆弾・紙鉄砲。つまり、実弾を発射して、挑発を執拗に繰り返している。仮に、原告が安倍首相同様な表現を用いて「不測の事態を招きかねない挑発行為!」と述べたとしたら、被告川上は「不測の事態とは襲撃の再発か!？」等と勝手な言いつけをつけるであろう。

[不 退]

正しきを以って退かず 己に正義あらば 信念を曲げるべからず

退くことなく 一貫して筋の通る戦いをせよ それが不退の真意なり